



～学生編 1～

現役学生が「東神大ならではの！」の授業の醍醐味、
学生生活の喜びを紹介します。

説教学入門
説教学演習

大学院2年生
藤野 雄大



「説教そのものが語る」その言葉を謙虚に伝えたい
と言う藤野神学生

「できない」ことに直面し、
苦しみながら「説教」の深みに近づく。

私は神学校入学前にも、また神学生になってからも、教会奉仕で説教をする経験がありましたから、この授業を受ける前までは、内心「けっこう説教は得意なのではないか」と思っていました。しかし、授業でその思いは打ち崩されました……徹底的に。

授業で行う「説教分析」では、他者の説教原稿——カール・バルトのような著名な神学者のものだったりするのですが——を読み4色のマーカーで内容を分類します。①神の御名、②説教者の言葉、③会衆あるいは世間一般の言葉、④聖書からの引用といったように。こうすると、説教者自身も意図していなかった“説教そのものが語る言葉”が浮かび上がってくるのです。授業では自分たちの書いた説教原稿も同様に分析し、皆で討論します。原稿は無記名で誰が書いたかわからないまま配られますので、皆けっこう辛口にコメントします。私も自分の書いた説教が授業で取り上げられ、分析されたときは凹みました。でも、この作業を繰り返すうちに自分の説教の問題点が見えてくるのです。

大学院生になると、授業だけでなく、学内のチャペル礼拝での説教も順番に担当します。他の神学生、先生方の前で御言葉を語るわけですからどうしても緊張します。終わったあとには近藤学長直々に説教についてご指導くださるのでなおさらです。このように、さまざまな場面で鍛えられますね。

ここまで「説教学」を学んで得た一番の収穫は、自分が説教だと思っていたものは説教ではなかったということ。たぶん、卒業までに、いや、一生かかっても説教が「できる」ようにはならないでしょう。でも同時に「説教」のわざの深さに気づくことができました。神さまの恵みに触れることのできる素晴らしい授業です。

ギリシャ語

大学院1年生
宮寄 薫



先生の熱意に圧倒されると宮寄神学生が言う
ギリシャ語の授業

難解な語学も、身につければ
真理の鉱脈を探る道具になる。

「説教学」が神学校の総仕上げだとすると、新約聖書の言語であるギリシャ語を身につけることは、牧師の基礎の基礎、土台です。だからこそ、必修科目なのですが、難しいからと腰が引けたまま消極的に授業を受けていては、もったいないと思います。

もちろんアルファベットも違えば、単語の活用、時制の変化など文法は複雑ですし、暗記することも山ほどあります。私は3年次編入生ですので、入学当初は前期に2コマ、後期に1コマの授業を受けねばならず、授業の進むスピードと膨大な課題にたいへんな思いをしました。単語カードを作ったり、声に出して唱えるなど身体で覚えて乗り切りました。

東神大でギリシャ語を学ぶことの最大の幸福は、ご担当の三永旨従先生(講師)が、「ギリシャ語の原典で聖書を読んで福音を伝える……世の中にこんな素晴らしいことはない!」と、確信と情熱を持って教えてくださることです。その思いに共感した私は、他の聖書の言語も学びたくなり、学部4年生のときにヒブル語を選択し、さらにお隣のルーテル学院大学で互換授業*のラテン語も取りました。同時に学ぶコツは、あくまでも私の場合ですが「ギリシャ語は論理的でクール、ヒブル語は自由でやんちゃ、ラテン語はキチンとしつつ色気もある」と古典語3兄弟それぞれに固有の“人格”を見極め、違う恋人と付き合っているつもりで(笑)頭を整理することです。

こんなちょっとした工夫で楽しく勉強できますし、学生同士で予習復習を助け合うこともありますから、怖がることはありません。なんといっても、聖書の原典の言葉は、キリストの真理の鉱脈を探る道具。これを手にしたら、もっと深いところに手が届くと思ひ、ワクワクしながら学んでいます。

*互換授業：隣接するルーテル学院大学と東京神学大学で単位を認定する科目。

